論　文

言葉によって神に近づく
—ルイス・デ・レオン『キリストの御名』への序章—

鶴岡　賀雄

—nombre-nomen-onoma-sem-ism-nama-ming-na—

1.　ルイス・デ・レオン紹介

ルイス・デ・レオン（Luis de León: 1528（27）-91）は，十六世紀のスペインで活動した神学者，聖書学者，詩人であり，いわゆるスペイン神秘主義思潮を代表する人物の一人ともされる。アラゴン地方，クエンカ県，ベルモンテに，六人兄弟の長男として生まれた。コンベルソ（改宗ユダヤ人）系だったが，父は司法官で家庭は裕福であった。叔父フランシスコ・デ・レオンはサラマンカ大学教授（教会法）を務めている。家系は幼い頃マドリードに移住，１４歳か１５歳のとき，サラマンカのアウグスティヌス会に入会し，翌年，修道誓願を立てている。これは異例の若さである。続いてサラマンカ大学に入学し，神学者の道を歩み始める。当時のカスティリャでは，ルネサンス人文主義の影響下に，聖書の原典（原語）研究の運動があり，とくに新設のアルカラ大学はその拠点だった。ルイス・デ・レオン（以下レオン）は，ラテン語，ギリシア語の他，アルカラ大学の Cypriano de Huelga からヘブライ語を学んでいる。

多方面に優れた能力を有したレオンは，以後，アウグスティヌス会を代表する学者として，当時のイベリア半島の神学の中心地サラマンカ大学で，神学や哲学，聖書を講ずる大学人としての道を歩み始める。しかしその歩みは平穏なものではなかった。厳格で非妥協的といわれる彼の個人的資質や，神学界における修道会間，大学においては学派間の勢力争いといった事情によるところが大きいが，具体的には，聖書解釈における彼の原語主義，とりわけ旧約聖書読解におけるヘブライ語原典の重視が，もっぱら敵対者からの攻撃の的となった。しかしこれは，レオンの神学そのものを支える言語観に根ざしたものであり，彼はこの点で譲歩することはできなかった。この彼の言語観こそが，本稿の主題である。

知られているように，トリエント公会議で反ルター主義的神学勢力の重要な一翼をになっていたスペインの神学界は，１５５９年のいわゆる Valdés の禁書目録以来，聖書の俗語訳を禁書扱いにする。それでもレオンは，１５６０年頃，修道女 Isabel Osorio の求めに応じて（当時女性はラテン語教育を受けられなかった），ヘブライ語原典に基づくスペイン語での雅歌注解（翻訳を含む）の試みに着手している（刊行は１８世紀末）。ヴルガタ訳聖書の価値を減ずるレオンの原語主義は，こうした動向に正面衝突するものだったが，彼が聖書（雅歌その他）の俗語訳の廉でじっさいに異端審問所に告発されるのは１５７２年のことである。それまでに彼は，サラマンカ大学のトマス・アクィナス講座（アクィナスの『神学大全』を講ずる）教授の地位をドミニコ会と争って獲得し（１５６１年），さらにより唯名論的なドゥランドゥス講座を，やはりドミニコ会

と争って獲得（１５６５年）して，サラマンカ大学の人気教授となっていた。アウグスティヌス会内部でも，派閥争いを経て評議員となっている。

ところが，こうした名声（と反撥）の最中，１５７２年，彼は，ドミニコ会，ヒエロニムス会の神学者たちに告発され，聖書の原典研究の同志だった Caspar de Grajal, Martínez de Cantalapiedra, Alfonso Gudiel とともに異端審問所に告発され，５月２７日，収監されてしまう。ヴルガタ訳聖書の軽視，雅歌の西訳，そしてユダヤ系出自ゆえの異端の嫌疑がその理由だった。以後彼は，四年半ほどを獄中で過ごすこととなる。ただし有罪が確定したわけではなく，いわゆる係争中の身であるため，一定の活動の自由は与えられていた。自らの告発の不当性を弁じた『詳細弁明書 *Amplia Defensa*』(1573) の他，ここで彼は，自らの信ずる聖書原典主義に基づいた註解書，『ヨブ記註解 *Exposición del Libro de Job*』，『詩篇第二十六注釈 *Comentario sobre Psalmo XXVI*』，そして本稿の題材である『キリストの御名 *De los Nombres de Cristo*』の執筆に着手している。そして１５７６年１２月７日，長きにわたった審問の結果，完全無罪判決が下る。獄を出た彼は，早くも１２月３０日には，サラマンカ大学で講義再開する。その開講一番の言葉は，「昨日の講義では・・・(hesterna die ...)」であったと伝えられている。彼の強固不屈の精神と厳格さを示すエピソードではある。(「昨日・・・」というのは，当時の大学では，教授は平日は毎日同じ時間割で講義をすることになっていたからである。この発言自体は事実ではないようだが，このような伝説が生まれること自体が，彼の謹厳な性格が当時からよく知られ，評判でもあったことを証していよう。）こうして彼は，名誉と名声とともにサラマンカ大学に復帰し，名実ともに同大学を代表する学者の一人となっていく。

その後，１５７８年にはいったん倫理神学（philosophia moralis）講座に移るが，１５７９年には念願だった聖書講座の教授の地位を獲得する。１５８２年には異端審問所に再告発されるが，このときは収監もされず，８４年には再び無罪を獲得している。このころが，神学者としての彼の円熟期と言え，上述の『キリストの御名』や，一種の雅歌註解である『家庭婦人の完徳 *La Perfecta Casada*』といった著作を刊行している。また，８１年に没したアビラのテレジアの最初の著作集編集の責を担い（８５年），８９年からの刊行にこぎつけている。この作業は，いわゆる神秘神学への彼の関心を決定的にしたと思われる。８９年には，ヴルガタ訳聖書の改訂企画に参加。最晩年の名著『ヨブ記註解 *Exposicion del Libro de Job*』を著す。詩編と雅歌とヨブ記という，旧約中でレオンの最も重視したテクストについてのスペイン語による注釈が，彼の神学思想を表明する主著群である。１５９１年には，アウグスティヌス会カスティリヤ管区副総監（Vicario General），さらに同管区長の名誉も得（８月１４日），その一週間後８月２３日，Madrigal de las Altas Torres （アビラ県）にて病没する。

こうした神学者としての活動のかたわら(1)，彼はルネサンス的教養に溢れた詩人としても少なからぬ作品を遺している(2)。とりわけ，この世を超えた境涯に憧れるプラトン主義と古典古代的田園詩が渾然と融合した抒情詩群によって，レオンは，黄金世紀文学の一翼を担う詩人としてもスペイン文学史上に揺るがぬ地歩を占めている(3)。かくて，ルイス・デ・レオンは，黄金世紀のスペインを代表する神学者，文人としての名声を得る。現在もサラマンカ大学の広場にはルイス・デ・レオンの胸像が置かれて，１６世紀当時の講義室を再現したルイス・デ・レオン教室も設けられている。

このような人物ではあるが，彼はそのルネサンス的偉大さゆえに，ある意味で孤立した存在であった。彼の神学の本領は聖書釈義にあるが，そのヘブライ語重視の態度は，周知のようにトリエント公会議の精神を体現していくスペインでは結局根付くことなく絶えてしまう。そもそも以下で見るように，彼のヘブライ語観は，近代聖書学を生んでいくような文献学とは根本的に異質のものでもあった。また，かれのいわゆるスコラ神学は，トマス主義とスコトゥス主義，またオッカム的唯名論の折衷であり，特定の形而上学的視点に貫かれたものではなかったため，近世スコラ学の諸潮流に連なるものでもなかった(4)。彼の「神秘思想」と言うべきものについては以下に検討するが，これも，アビラのテレジアと十字架のヨハネを頂点とするフランシスコ会～カルメル会的伝統とは異なった性格のものであり，一つの伝統を開くようなものではなかった。彼をキリスト思想史の中にふさわしく位置づけるには，十六世紀スペインという枠を越えて，より広い全ヨーロッパ的な視野を必要とするように思われる。彼はそうしたスケールの人であった。以下，本稿では，そうしたレオンの広義の神秘思想をいわば言語論的な神学思想と捉えて，主著の一つ『キリストの御名』を主題材にその大概を抽出してみたい(5)。

2.　『キリストの御名』における言語論的神秘思想

・『キリストの御名』

『キリストの御名』は，新旧約聖書から，キリストを指していると解釈される言葉ないし呼称—旧約からの場合はいわゆる予表論的解釈になる—を十四取りあげ，そのそれぞれについて，得意のヘブライ語の原義に随時遡りながら，神学的あるいは建徳的な，さまざまな議論，思索を展開するという内容の書である(6)。対話篇の形式をとる。十四の名とは，若枝（pimpollo），神の尊顔（faces de Dios），道（camino），牧者（pastor），山（monte），来るべき世の御父（Padre del siglo futuro），神の御腕（brazo de Dios），神の法（rey de Dios），平和の君（Principe de paz），花婿（esposo）（第一版では，以上の十のみ。以下は，第二版以後の増補），神の御子（Hijo de Dios），恋人（amado），イエス（Jesús），子羊（cordero），である(7)。

が，本稿では，個々のキリストの名を巡るレオンの議論ではなくして，彼がこうした形での広義の聖書解釈を，自らの宗教思想，ひいては神秘思想の表現として行うに際しての理論的前提として，彼がそもそもキリストの「名（nombre）」というものをどのように考えているのかに焦点を絞って検討する。（彼の実際の言語実践については，『キリストの御名』本文，『雅歌注解』『ヨブ記注解』といった聖書解釈，また彼のいくつかの珠玉の抒情詩を検討する必要があるが，それは別稿に委ねたい。）そこに，上述のように，ヘブライ語を含む古典語に精通したルネサンス的人文主義的聖書学者であり，且ついわゆる近世スコラ学的哲学・神学を講義をする大学教授でもあり，なおまたスペイン語によってプラトン主義的な清澄さを帯びた美しい叙情詩を幾つも遺している詩人でもあった彼の，ある意味で独特の神学思想ないし神秘思想の原理が示されていると思われるからでもある。

ちなみに，現代スペインにおける「黄金世紀」文学の代表的研究者の一人 Víctor García de la Concha は，ルイス・デ・レオンに「神秘主義 mística」というものを認めうるとすれば，それは彼がその最初の著作集の編者ともなったアビラのテレジアのそれのような強烈な神秘体験によるものでも，言葉と知性の極限において言葉を超えるものを精密に捉えようとした十字架のヨ

ハネのそれに類するものでも，また著述によるよりもむしろこの世を超えたものを原理として行動するイグナチウス・ロヨラの行動の神秘主義でもなくして，あくまで言葉のエレメントの内に留まりつつ，その深く広い言葉への愛としての文献学（filología）から発して，その精華として生まれる言葉の芸術ないし美学（estética）として実践されるものであり，それこそが彼の宗教（religión）であるとしている(8)。これを言い換えて，文献学（filología）から詩学・文学的創作（poética）を経て神秘思想（mística）へ，としてもよいだろう。このデ・ラ・コンチャの図式は正鵠を射たものと思われる。

・議論の情景

レオンの「名」を巡る一般論的議論は，同書の第一巻の序章に相当する「名一般について（De los nombres en general）」で集中的に論ぜられる（以下に言う，「導入」「序章」等は，編者による区分）。が，それを見るためにまず，この議論が展開される際のテクスト上の「枠組」をいささか紹介しておきたい。それは「名とは何か」という言語哲学ないし認識論の問いとも見える問題が，レオンにとってその宗教思想，神秘思想に直結するものである所以を，ある文学的な仕方で示していると思われるからである。

まず，全体の献辞（Dedicatoria）（同書は親しい宗教裁判所審問官だったDon Pedro Portocarreroに献じられている）に，次ぎのような文が読まれる。

> 「聖霊が聖書のなかでキリストに与えたさまざまな御名の力と意味（la fuerza y la significación）とを理解するなら，これらの〔キリストにおける神の〕完全性（perfecciones）のすべてが，あるいはほとんどが，理解できるでしょう。というのも，これらの名は，それぞれが短い暗号（cifras breves）のようなもので，そこに神は，驚嘆すべきやり方で，このことについて人間理性が理解でき，また理解すべきすべてのことを封じ込めておかれたのです。」［147］

つまり，聖書におけるキリストの「名」には，「意味と力」とがあって，それを理解する（entender）ことがすなわち，神であるキリストを理解することになる，というのである。言葉としての「名」の「意味と力」の理解が，キリストそのものの理解を与えるというのである。レオンのこの聖書観，ないし聖書の言葉についての認識は，まず確認しておかなければならない。つまり彼によれば，キリストとは何なのか—その「完全性」—を理解するには，聖書に描かれたキリストのあり方やその教えの理解にも増して，その「名」が有する意味の理解が大切だというのである。これは，現代の視点からはまったく奇異な主張に映るだろうが，以下に見るように，レオンの或る体系的な「名」の言語神学に基づいている。それを詳述するのが序章「名一般について」の課題である。

続いて，「導入（introducción）」として，対話の行われる状況が描かれる。時は六月，聖ヨハネ祭（夏至）の頃。カスティリャ地方の最も麗しい季節といえる。大学も休みに入った聖ペトロの祝日（６月２９日）に対話はなされる。場所は，サラマンカの街を横切って流れるトルメス川のほとり，マルセロ，サビノ，フリアノの三人の対話者が住むアウグスティヌス会修道院の傍の，

美しく快い田園—いわゆる locus amoenus—である。

その日，早朝ミサの後，三人は連れだって，晴れた爽やかな朝の森の中を散策する。そして葡萄の木の下，小さな泉のせせらぎのほとりに腰をおろして，しばしの沈黙のあと，対話は始まる。

主たる発話者はマルセロ。ただし「都合により仮名にする」[148] とされる。もちろん，この対話自体が創作なのだから，これはレオンの文学的工夫である。彼の「キリストの御名」理解の開陳が，本書の事実上の内容となる。マルセロはすでに老境にあり，「長い人生の労苦の後」[ibid.] の隠遁生活を送っている。黒胆汁質とされる。三人の対話者は，皆何らかの意味でルイス・デ・レオン本人の分身と言えるが，マルセロはレオン本人をほぼ写しているとされる。あるいは「聖書学者」レオン，と言えようか。サビノは，これに対置される若者で，詩人でもある。多血質とされる。「詩人」としてのレオン，といえようか。フリアノは両対話者の中間に位置して，とくに理論的な質問によって対話を進行させる役回りと言える。中年にある。敢えて言えば「神学者」レオンということになろうか。

対話は，サビノのこんな言葉で始まる。

> 「こんな田園の風景を眺めると，言葉を失ってしまう人々がいます。それは，深い知性をもつ人の条件にちがいありません。でも僕は，緑のなかでは，小鳥のように，歌いたくなるのです。あるいは語りたくなるのです。」[150]

若者らしい好奇心に富むサビノは，マルセロが「キリストの御名について」書いていたノートをかってに持ってきていた。その冒頭には，

> 「聖書中でキリストに与えられている名は，彼の徳と業（oficios）と同じく数多くあるが，主要なものは十である。他のものは，この中に含まれており，また還元してとり集めることができる。その十の名とは，これらである。若枝，神の御顔，道，牧者，山，来るべき世の父，神の腕，神の王，平和の君，花婿。」[153]

とあった（上述のように，後に神の御子，子羊，恋人，イエスの四つが追加される）。サビノはここでこのノートを取り出して，マルセロに説明を求めるのである。フリアノもサビノの提案に賛同する。こうして，この十（四）の名の一つ一つについて，もっぱらマルセロが聖書の出典を挙げその釈義を展開する，というかたちで進む。フリアノ，サビノもときおり介入して，適切な質問をし，論を展開させる役割をになう。また詩人のサビノは，美しいスペイン語で詩篇を詠じることもある。

・マルセロ＝レオンの言語思想

しかしマルセロは，二人の求めに応じるに当たって，先ず，そもそも「名」とは何であるか，またとくにキリストの名とは何かについて，一種の一般理論を述べることから始める。以下本稿では，冒頭に述べたように，マルセロ（＝レオン）による個々の「名」の釈義内容ではなく，そうした釈義が可能となり，それに宗教的意義を与えているところの，この彼独特の「名」の理論における宗教的言語思想ないし言語論的神学，ひいては言語神秘思想と呼んでもよいであろうものを探り出すことを目指す。それは，「序章」の中心をなすマルセロの言葉に集中的に，きわめて

濃密なかたちで語られている。そこで，その多くを引用しながら議論を解きほぐし，主要な論点を摘出していきたい。そのためにまず，マルセロ＝レオンの言語一般についての説明の最初の一節，彼の言語理解とその宗教的意義が簡潔にかつ決定的に提示される節を掲げておく(9)。

「名（nombre）とは，簡単に言えば，それについて言われるそのものの代わりをなし（se substituye），そのもの自体としてあつかわれる短い言葉（una palabra breve）である。あるいは名とは，名づけられる（se nombra）ものそれ自体であって，ただしそれがもっている現実の，本当の存在（el ser real y verdadero）においてではなく，われわれの口と知性とが与えるところの存在において名づけられるもの，それ自体である。

なぜなら，こう考えなくてはならない。すなわち，あらゆるものの完成（perfección）とは，また，とくに知性（entendimiento）と理性（razón）とをもちうるものどもの完成というのは，それらの一つ一つが，自らのうちに他の一切を有していること（cada una dellas tenga en sí a todas las otras），また，それが一つ〔のもの〕（una ［cosa］）でありつつ，それにとって可能なかぎり，全て（todas ［cosas］）でもあること，このことのうちに存する。なぜならこのことにおいて，〔知的存在は〕神に近づく（se avecina a Dios）のだから。神は，自らのうちに，この一切を含んでおられる，だからこの点において向上すればするほど，神に似たもの（semejante）となって，神に近づくのである。この神との類似（semejanza）こそが，こう言ってよければ，すべてのものの共通の念願であり，全ての被造物が，その望みを向ける目的（fin），標的のようなものである。

かくて，もの（cosas）の完成とは，以下のようなことになる。つまり，われわれの一人一人が完全な世界（un mundo perfecto）となり，その結果，こうした仕方で，全てが私のうちにあり，私は他の全てのうちにあり，私はそれら全ての存在（su ser）をもち，全てが，その一つ一つが私の存在（el ser mio）をもって，この宇宙という仕組みの全体（toda aquesta máquina del universo）が互いに抱き合い，環になって，その多様な差異（la muchadumbre de las diferencias）が一性（la unidad）へと還元されるのである。そして混乱することなく混じり合い，多にとどまりつつも（permanecido muchas）多ではない。このようにして，われわれの眼前には多様性，多彩性（variedady diversidad）が広がり展開しているけれども，一性が全ての上に勝利を収め，君臨し，その座を据えているのである。こうしたことが，被造物がそこから湧き出てきている神に近づく（avecinarse; BAC 版は avecindarse:神の住まいに迎え入れられる）ということである。その神とは，三位格においてある一つの本質であり，また，理解を超えた無限個の卓越性においてありながら，唯だ一つの完全で単一な卓越性なのである。」［155-156］

・「名」の三層の存在論

マルセロ＝レオン（以下，レオンとする）はまず，「名（nombre）」を「それについて言われるそのもの（aquello de quien se dice）の代わりをなし，そのもの自体としてあつかわれる短い言葉」と定義している。この定義は，すでにレオンの論の基本枠組を示している。すなわち，彼はここで言語一般を論じようとしているわけでは必ずしもない。論の焦点は「名」にある。文法用語にすれば「名詞」と訳してもよいものである。彼の言語観はそもそも名詞を以て基本構成要素

となしていると見てよい。これは，中世以来行われていた論理学，言語理解からして自然な態度でもあった(10)。名のそして彼にとって名詞とは，なによりもまず，その「名指すもの」の「代わり」を為すものである。別の箇所では，名の「目的は，それが意味表示する（significar）不在者（lo ausente）を，その名においてわれわれに現前するもの（presente）となすこと，また，遠くにあるものをわれわれの近くに，また一つに（junto）すること」[154] にあるとされる。

そうしたものとして，「もの」と「名」は一対一的対応関係にあるのだが，しかもその対応関係は，たんなる便宜的記号というよりももっと濃厚なものとして捉えられている。名はまた，「名づけられるものそれ自体（aquello mismo que se nombra）であって，ただしそれがもっている現実の，本当の存在（el ser real y verdadero）においてではなく，われわれの口と知性とが与えるところの存在において，名づけられるものそれ自体」なのである。

名とは，そこで名づけられるもの，つまり名を与えられる「当のもの自体（aquello mismo）」であるとは，一見奇妙な，あるいは大胆な主張だろう。しかしまずは，この「名」と，その名が与えられる「もの」とのなんらかの同一性が想定されなければ，そもそも「名」は名たりえない，名として機能し得ないことだろう。この，名を名たらしめている，「名」と「名づけられるもの」との本質的関係を，名は名づけられるもの「それ自体である」という言い方でレオンは捉えるのである。しかしもちろん，名は言葉であるから，当の「もの」自体ではない。少し後では，「いま私が，それ自体の（esa misma），と言ったのは，類似という理由によって（en razón de semejanza）のことである。その〔存在の〕質としては（en cualidad），様態は別（de modo diferente）である」[157] と補っている。そして，その，言葉とものとの相違のあり方を彼は，名とは名づけられるものの「現実の，本当の存在」そのものではなく，「われわれの口と知性とが与えるところの存在（el ser que le da nuestra boca y entendimiento）」という意味で，「そのもの自体」なのだ，とするのである。

では，「われわれの口と知性とが与えるところの存在」とは何のことか。「口が与える存在」とは，音声として発話され，それを書記化することで文字ともなる，いわゆる言葉である。そしてこれとは別に，レオンは，「知性が与える存在」としての名をも考えている。かくて，彼の「名」と「(名づけられる）もの」自体の関係を巡る一種の言語論的存在論がここには想定されていることとなる。それについて，マルセロ＝レオンは，上の引用にすぐ続けて簡単に説明していくこととなるのだが，予め整理するならば，ここでレオンは，「名」を論ずるに関して，「もの」自体ないし「事物」と，その「イメージ」ないし「観念」，いわゆる言語的な名という，三つの存在レベルを考えている(11)。

・「名」の第一層：「もの」自体（事物）

第一のレベルは，上に「(名づけられる当の）もの」自体とよんできたものの水準であり，なんらか物体性を有した個物から成る世界である。この水準のものを彼は「事物（cosa）」とも言っている。そうした「もの」のありようは，「物質的で粗雑（materiales y toscas）」であって，そのため「一つ一つが全て他のもののうちにある（todas unas en otras）」といったことは不可能である [156]。「もの」が「それ自体として有している存在とは，嵩と物量としての存在（ser de tomo y cuerpo）であり，また堅固な存在，したがって存続する存在である。」[157]

が，はじめの引用に宣言されているように，こうした「もの」の存在様態においては不可能な，一つ一つの裡に他の全てが存することこそが，知性的存在（たる人間）の完成なのであった。そこで自然（la naturaleza）は，人間がこの理想を実現しうる「賛嘆すべき巧み（admirable articifio）」[156] をしつらえてくれた。これが言語に他ならない。そしてその主たる構成要素が「名」なのである。

・「名」の第二層：「もの」の「似像（imagen）・似姿（figura）」（観念）

しかるに，この名の存在レベルはさらに二つに分かたれる。その第一，上記の「もの」のレベルを第一とすれば第二のレベルについて，レオンはこのように言う。

> 「そこで自然は，事物の一つ一つに，それが自らのうちにもつ現実の存在（el ser real）に加えて，それ自体にそっくりの（todo semejante）別の存在（otro ser）をも与えた。ただしそれ〔別の・第二の存在〕は，そのもの自体〔第一の存在〕よりもっと精妙で（delicado），ある仕方でそのもの〔第一の存在〕から生ずる。これによって一つ一つの事物は，自分に近接したものたち（sus vecinos）の知性（entendimiento）のうちで，一つ一つが全てのうちに，また全てが一つ一つのうちに（cada una en todas y todas en cada una）存在し，生きることとなった。さらにはまた，〔自然は，その第二の存在が〕その知性から，同じような仕方で，言葉によって口に出てくるように（con la palabra a la boca）も命じ・秩序づけたのである。〔こうして〕その物質的存在においては，それら事物の一つ一つは，それ本来固有の場所（su propio lugar）を要求するけれども，かの〔第二の〕精神的・霊的存在（aquel espiritual ser）においては，多くの事物が互いに妨げあうことなく，仲良く結合して（en compañia juntas），同じ一つの場所に（en un mismo lugar）存在（estar）しうるようにした。そしてさらに驚嘆すべきことに，同じ一つのものが，同時に多くの場所にも〔存在しうるのようにしたのである〕。」[156]

第二のレベルとしての名とは，ここでは，それがその名であるところの当の事物と，以下のような関係にあるとされている。まず，①事物とその名は，「そっくり（todo semejante）」である。両者は，「同形をなす・形相を同じくする（conformidad）」とも言われている。次に，②事物が「粗雑（tosca）」であるのに対して名は「精妙（delicado）」である。そして，③名は「或る仕方で（en cierta manera）」，名づけられる当のものから「生ずる（nacen）」。

②の粗雑と精妙という対比は，古代・中世の自然学の中で用いられてきた対比であり，認識論よりは自然学に属する語彙であり概念である。両者の違いは，「粗雑」な物体が同一の場所に共存できないのに対して，精妙な何か，「霊的」とも言われる水準における存在は同一者において共存可能だという点に置かれている。この点が，レオンにとって言葉ないし名の持つ決定的な特性であり意義である。

そして，人が口に発音しうるものとしての言葉ないし名が**第三のレベル**とされているわけであるが，これについては後に見ることとし，ここではまず，存在の第二のレベルとしての名について，そのあり方をより詳しく見ておこう。この，③事物から生じ，①その事物と「そっくり」で，②「精妙」な，つまり同一知性内に共存可能であり多くの知性の内に同時に存在しうる何かとし

ての「名」とは，いったいどのようなのもだろうか。

レオンはこのようにも言っている。それ自体においては「嵩と物量としての存在」，「堅固な存在，したがって存続する存在」である「もの」は，しかし

「それらを知解する知性のなかでは，知性の条件にしたがって生じ（hacense a la condición de él），また，精神的・霊的で精妙になっている。かくて，一言で言うなら，〔「もの」は〕それ自体においては真実であり（en sí son la verdad），知性において，また口においては，真実の似像（imágenes de la verdad）である。すなわち，それら自体の〔似像〕である。そしてその似像は，当の事物自体に入れ代わり，その代理となる。」[157]

つまりこの意味での名とは，

「それについて名が言われる当のものの似像のようなものである。あるいはまた，別のあり方に変相したそのもの自体（la misma cosa disfrazada en otra manera）である。」「そしてその目的は，それが意味表示する（significar）不在者（lo ausente）を，その名においてわれわれに現前するもの（presente）となすこと，また，遠くにあるものをわれわれの近くに，また一つに（junto）することにある。」[159. 上引]

このように「名」が人間の知性において存在する，「もの」の代理ないし似像であるという規定からするなら，それは「もの（について）の観念」ないし「概念」とでも言うべきものであるとも感じられよう。おおよそそのように解しておいてよいと思われる。ただし，レオンはここで，中世的であれ近世的なそれであれ，いわゆる認識論の枠組での議論をするものではない。レオンの本懐は聖書神学者たるところにあり，その論の特質は，あくまでそれが「名」として捉えられているところにある。だから，そうした名＝観念が，ものからいかにして「生ずる」のか，についても，レオンは認識論的議論を展開するわけではない。ただそれは，つまり人間の知性がものの名を知りうるという事実は，自然がしつらえた「驚嘆すべき巧み」とされるにとどまる(12)。

ただ，敢えて言えば，レオンの「名」は，ある意味でデカルトやロックの言う「観念（idea, notion）」とはその存在把握において大きく異なり，彼等を飛び越えてライプニッツの言う「表象（representation）」に近いところもある。なぜなら，上述のように，レオンはこの「観念」としての名の最大の特徴を，同一知性の内に多くの名が共存しうること，また同一の名が多くの知性の内に同時存在しうることに見ているのだった。（彼が「知性の単一性」を主張するアヴェロエス主義者でないことは言うまでもない。）「もの」が「名」を生む所以は，（「観念」としての）名が存立する場所としての知性（人間）自体の「完成」にあるのだったが，それはまた，この宇宙を形成している「もの」たちがその「粗雑」な物質性を脱ぎ捨てて，「精妙」な「名」において「一つになる」ことでもある。それはたしかに，「驚嘆すべき」こととも思われよう。そこには，「一即一切」「一切即一」とでも言いたくなる「名」の存在様態がイメージされており，レオンはそれを，ライプニッツを連想させずにはいない鏡の比喩を以て説明するのである。

「これ〔知性において，多くのものがその名というかたちで共存しうること，また一つのものの名が多くの知性内に同時に存在しうること〕については，鏡において生ずることが

一つの譬え（ejemplo）になりうる。つまり，沢山の鏡を集めて目の前に置いてみると，ただ一つである顔の像（imagen）が，同じものを，同時に，それらの鏡の全てに写す・反射する（reluce)。そしてそのどれもが，混淆することなく目の方に戻ってくる，そしてこの目を通して，これらの鏡の中に自分を見ている者の魂の方へと〔戻ってくる〕。こうした次第で，結論として，全ての事物は，われわれがそれらを知解する（entendemos）とき，またわれわれの口と舌においてそれらを名づける（nombramos）とき，われわれの知性（entendimiento）のなかに生き，存在を有していることになる。そして，それらの事物がそれ自体においてあるところのもの（lo que ellas son en si mismas）が，われわれの口と知性〔の働き〕とが真理に応じたものならば（verdaderos)，われわれのうちに，それ自体の存在の理的様態（esa misma razón de ser）をもつことになる。」[156-157]

この譬え（ejemplo）は，たしかに，世界の宗教思想にときおり見られる，一即一切，一切即一の，いわゆる華厳的な世界観を連想させる(13)。多くの鏡を見る者の同一の像が，それらを見る者の瞳の中に同時に存在する（一の中の多）ということのイメージである。

しかるに，この無数の鏡の相互無限反射のイメージのなかでも，レオンのそれはある特徴を有している。それはまず，①この譬えは，多くの鏡を自分の前に置いてそれらを見ている当の主体（魂ないし知性）の視点から語られていることである。（この点で，世界とそれを構成する諸物の相互関係，をいわば客観的に，つまり特定の視点無しに，記述する華厳経やライプニッツのそれとは異なる。）一即一切，一切即一の世界観は，その一構成要素としての魂の視点から，ここでは捉えられている。つまり，私が世界を見，認識するときの世界の見方，見え方を示す，という構図になっている。レオンの論が，知性の完成＝完徳をめざす「宗教的」なものである所以の一端であるが，このことは，次の点に関わってくる。すなわち，②レオンはこの譬えにおいても，あるものAが別のものBに映って（移って）くるところもの，つまりBにおけるAの「代理（substituto)」を，「概念（noción, noticia)」でも「観念（idea)」でも「記号（signo)」でもなくして，「名（nombre)」であるとしているのである。彼にとって観念とは，魂ないし知性にとっての一種の内部言語なのであって，そしてこちらこそが本来の意味での言葉であるとしているのである(14)。これは一見奇妙な捉え方だが，こう捉えることでレオンは，たんに認識論的に考えられた知性の能力の限界を超えて，より深い世界・宇宙の実相を見出す可能性を確保しようとするのである。

つまりこういうことである。この無限鏡像的一即一切的世界観は，世界の実相を示す存在論であり，またそうした実相の認識論であるのだが，より根源的にこれが「名」についての論すなわち言語論としてとらえられ，語られることで，ものの正しい認識とは正しい名づけのことと解されることとなる。だから，「われわれが知解する（entendemos)」ものの名が「正しい（verdaderos)」ならば，そしてそれを正しく「名づける（nombramos)」ならば，それによって，世界を形成している「もの」たちは，つまり世界そのものは，正しく，ありのままに認識される，つまり世界が知性のなかに「うつる（映る・移る)」，ある意味で知性の内に世界が入ってくるのである。あるいは，一即一切的なあり方をしている世界が，その一要素—モナド？—である私において現実化・現実態化する。こうして「それらの一つ一つが，自らのうちに他の一切を有し（cada una dellas tenga en sí a todas las otras)，また，それが一つ〔のもの〕（una）でありつつ，それにとって

可能なかぎり，全て（todas）でもある」[156.上引] という関係が，この宇宙と私との間に成立ないし現成する。そしてこの知性認識の有りようは，まさに，この宇宙の実相についての如実知であるがゆえに，神御自身の有する世界の認識内容でもある。この知性認識の実現こそが，知性体としての認識の魂の完成（perfección）＝完徳なのであり，このことによって，知性体である魂は，「神に近づく（avecinarse a Dios）」のだった。人間の魂は知性体であり，その知性の完成が人間の完成である，との「完成＝完徳」観は例えばアクィナスと同じだが，それがどのようにして可能なのかは，あくまで「正しい言葉」を探究しそれを知ること，として具体化するのである。言葉への愛の人（philologus）であり詩人であったレオンの，言葉への信頼と愛着がうかがえよう(15)。

・「名」のレベル３：「音声」と「文字」（言語）

このように，レオンにとって知性体としての人間の魂の完成は，世界と神とをありのままに知性認識する—ものの正しい名を知る—ことである。しかるに，ここからレオンの言語論的神学は次の段階に入る。というのも，人間の知性は有限であって，そのため，宇宙の全事物の名を，観念としての名を，知ることが人間にはできないからである。

のみならず，レオンがそれに親近・接近し（avecinarse）たいと願う神自身に対しては，これはいわゆる事物ではないので，物の名と同じ仕方で，つまり感官で認知した物体からいわば「自然的に」魂の内にその観念としての名が生まれる，という仕方では，神の名が魂に生じることはあり得ない。ここで，レオンの名の存在論の第三のレベル，つまり言語としての名が肝要な意義を帯びてくる。言語としての名，レオンが「口と声における名」と言うところのものである。常識的にはこれこそが名である。

この，言語としての名は，上述のように，魂の内にある観念としての名に，発音と記述文字という一種の身体性ないし物体性—現代の言葉で「実定性」と言ってもよいだろう—を，何らか人為的に（de arte, por arte）付与したものとされる。この，「観念」（第二の層）と言語（第三の層）との関係は，「人為的」である限り，「もの」（第一の層）と「観念」との関係が「由来する」「依存する」「起源となる」といった意味で「自然的（natural）」であったのと異なり，その「類似性」ないし「同形性」は十全ではありえない。それでも，この観念としての名と口における名，言葉としての名の間には，何らかの類似性がやはり保たれている，とレオンは見なす。つまり，「（言語としての）名」は，名づけられるもののもつ「何らかの特殊な固有性を意味表示する作用（significación de alguna particular propiedad）と，それら〔の名〕がそれについて言われる当のものに固有なものの幾分か（algo de lo que es propio a aquello）を意味表示する作用をもっている。そしてそれらの名は，その〔名づけられる〕ものの特殊な鉱脈から生じ流出してくるかのようにして，採用されたものである。」[159]

その類似性のかたちとして，彼は，①言語（単語）の意味形成ないし意味連関（significación），②当の「もの」と「言語」の「音声（sonido）」的近接性—いわゆるオノマトペ—，③そして，それを記述する文字（letra）の近接性，の三種類を挙げている。これらの類似性の残滓は，スペイン語等の世俗言語においても見られるのだが，とりわけ，神的霊感を受けてアダムが楽園で事物に名づけていった原初の名，またそれをうけ継いでいる聖書の言語であるヘブライ語やカルデア

語（古代オリエントの言語一般を指す）においては，名と名づけられた「もの」との本性的類似が十全に保たれている，とされる。

「このことが諸言語において常に守られているわけではない。[...] しかし，本当のことを言うなら，あらゆる言語のなかで最初の言語（la primera lengua:ヘブライ語）においては，ほとんど常にそうなっている。」[159]

ここでレオンの思考は，近代的言語学，文献学に通じるある実証性をもつと同時に，しかし本質的には，その言語観は，古代以来の伝統を有する広義の魔術（magia）的言語観であるといえる。彼はここでいわゆるアダムの言語としてのヘブライ語観を認めており，さらには，カバラ的な文字操作をも承認するのである。いささか具体的に見ていこう。

①言語（単語）の意味形成ないし意味連関とは，要するに語の派生ないし語源関係による意味の解明である。レオンが挙げる例は，スペイン語の corregidores（国王代官）が corregir（矯す）に，casamentores（仲人）が casa （家）と mentar（助言する）に由来すること，といったものである。やや特殊な術語の意味を，その由来ないし語源に遡って語の—つまりはその語（「名」）によって把握されている事柄の—真義，深義を解明する手法は，いまもしばしば行われるであろう。『キリストの御名』本論では，レオン＝マルセロは，ヘブライ語の語源ないし語の派生関係によって，聖書の語句の意味を解明する方法を頻繁に用いている。また，ある「もの」の本性とその「名」の本質的関連性の例として，Abram（レオンによれば「卓越した父」の意）が Abraham（「多くの人の卓越した父」の意）に，Sarai（わが貴婦人）が Sara（貴婦人）と名を変じたこと，を挙げている。[160]

②ものと言語の音声的近接性とは，いわゆるオノマトペのことであるので，実例は省略しよう。

そして，③ものとそれを記述する文字の形態（figura）的近接性の例として挙げられるのは，ヘブライ語文字のいわゆるカバラ的読解法，操作法である。「ヘブライ語の造語法のさまざまな特性」や，ヘブライ文字の配置，文字の開閉箇所の操作による「カメレオンのような」意味の変化が指摘されている(16)。なお，レオンがカバラの諸技法をどのような経路で知ったのかについては未詳であるが，キリスト教カバラの発信源の一人だったエディジオ・ダ・ヴィテルボは，スペインのアウグスティヌス会にも大きな影響力をもち（同会総長も務めた），同会修道士にアルカラ大学でのヘブライ語修得を勧めていたことを指摘しておく。

・「キリストの名」へ

以上のような「名」の重層的な理解の上に立って，「キリストの御名」を巡る釈義的対話は展開していく。しかしなぜ，「神の名」ではなくて「キリストの名」であるのか？人間の魂の完成は，神の全知への接近にこそあるとされていたのではないか？

だが，先にも述べたように，神は世界の中での個物ではない。したがって，神の「正しい名」は，自然的には，つまり事物がその個物についての似像ないし観念を知性の中に生み出すような仕方では，人の知性に入ってくることがない。では，人は神の名をどのようにして知りうるのか。これは，じつは対話者の一人フリアノの問いである。彼の問いは鋭い。

「では，いったいどんな声（voz）が，またどんな概念（concepto）が神の名になりうるの

か？」（大意）［165］

さらに続いてこうも問う。

「神の名の目的が，それを媒介（medio）として，名づけられる神をわれわれのうちのものとなすことにあるなら，神は〔我々を含む〕一切の最深部に，それ自体の存在として内在するのだから，神の名は無用ではないか。」（大意）［ibid.］

はじめの問いに対するマルセロ＝レオンの答えは，聖書の啓示の言葉に依拠するものとなる。フリアノのこの問いに先立つ説明で彼は，旧約聖書における「神の固有名」"YHWH"について，このようなカバラ的な説明をしている。

「かの言語〔ヘブライ語〕において神の固有名（el nombre propio de Dios）［...］が記される文字の形態と性質とが，こうしたすべてを示していよう。なぜなら，それが発音される音に着目すると，すべて母音である。まさにそれが意味表示しているかのもの〔神〕がそうであるようにである。つまり，〔神は〕そのすべては存在であり生命であり霊であって，いかなる構成物も質料の混入もないのだから。また，それが記されるヘブライ語の文字の性質に注目すると，それはこうした性質を持っている。すなわち，その文字の一つ一つが他の文字の位置を占めることができる。［...］かくて，潜在的には（en virtud）一つ一つの文字がすべての文字であり，すべての文字が一々の文字である（cada una de ellas todas, y todas son cada una）。このことは，一つには，神における純一性（sencillez）の似像であり，また一方では，神のもつ諸完全性の無限の多様性の似像でもある。なぜなら，すべては一つの偉大な完全性であり，その一つの完全性はすべての諸完全性であるのだから。こうしたわけなので，［...］神の完全な英知（sabiduria）は神の無限の義（justicia）と差異のないものとなる。また神の義は神の偉大さ（grandeza）と，神の偉大さは神の御憐れみ（misericordia）と〔差異がなくなる〕。そして力（poder）と知（saber）と愛（amar）とは，神においては全てが一つ（en Él todo es uno）である。そして，これらの神の諸善の一つ一つにおいて，我々がそのどれかを他からいかに引き離し遠ざけようとも，すべては一緒にある。どの部分から見ようとも，それは全体であり部分ではない。かくて，すでに言ったように，神の名を構成している文字の性質は，こうした神のあり方（razón）と同形（conforme）なのである。」［163-164］

こう言ってマルセロは地面に，“ㄱㄱㄱ”といった線を書いて，このように言う。

「カルデア文字では，この聖なる御名はつねにこのように形象化される。これは，ご覧の通り，神の三位格の数と，各位格の相等性と，各位格が唯一の本質において有している一性の似像である。」［164］

しかしマルセロ＝レオンは，いわゆるカバラ主義者ではない。そうした説明に一定の意義を認めてはいるが，それを基礎に神の名の神学を構築しようとはしていない。神の本当の名は，カバラ的な手法に拠るのではなくして，あくまで文献学的に聖書を精査することによって探り出す他

はないのである。その態度は，いささかパセティックな情念を込めた次の言葉に読みとることができるが，そこには，終末論的希望が導き入れられずにはいない。なぜなら，フリアノの言うとおり，神はたしかに，全ての人の魂の根底に現存している。そのはずであるのだが，しかし神は，この世においては，そのようなものとして決して我々にとって現前してはいないし，人はこの世では，「もの」そのものである名（名の第一の層）を，神に関して得ることはできず，聖書に与えられた実定的な名の理解を通して神そのものに「近づく」他はないのである。少々長くなるが，引用しておく。

「神は我々の存在にとって現在し，結合している（está presente y junto con nuestro ser）とは言える。しかし我々の視界（vista）からは，また我々の知性（entendimiento）が渇望する明瞭な認識（conocimiento claro）からはたいへんに遠い。こうしたわけで，神から離れてこの涙の谷を彷徨っている間は，神はその御顔を以ては我らに顕れてはおらず我らの魂と結合してはおられない。だから，その御顔の代わりに，口においては何らかの名と言葉とを，知性においては何らかの彼の御姿（alguna figura suya）とを保つようにすることが望ましいし，むしろ必要であると言いたい。それがどんなに不完全で暗いものであっても。聖パウロの言い方では，謎のようなもの（enigmática）であっても。なぜなら，今，我ら囚われの魂は，この地上の牢獄にあって，暗闇の中にいるかのように労苦し苦闘しているのであって，そこから飛び立って，かの光明の明澄さと純粋さへと出で立つそのときには，今も我らの存在と結合しておられる神御自らが，我らの知性とも結合されることだろう。そうなれば，神自らが，他の第三者たる似像の媒介無しに，魂の視界に結合されることとなろう。そしてそのときには，神の御名は，神が〔神自身により〕見られるその御姿と様態のままに（en la forma y manera que fuere visto），神ご自身以外のものではないであろう。そして，一つ一つの名が，それが神について〔神自身が〕見，認識するであろうところの一切をもって（con todo lo que viere y conociere de Él），神を名づけることになるだろう。つまり，〔神が〕神を認識するように，それと同じやり方で，神自身によって神を〔名づけるだろう〕（con el mismo Él）〔ここでレオンはヘブライ語の 'El（神）とスペイン語の él（彼）を懸けている〕，ということである。」[166]

この終末的完成においてこそ，名の三層は第一の「もの自体である名」の層に帰着する。しかしそれはなお「名」でもある。

「かくて，我々が神を〔直に〕見るであろう天国においては，神御自身の他に神の名は必要なくなるだろう。が，この暗き世においては，神を保有してはいても，それをほの見ることさえないのだから，それに何らかの名を付けずにはいられないのである。」[167]

では，その我々が名づける神の名とはどのようなものか？

「神は無限の完全性と存在との深淵（un abismo de ser y de perfección infinita）であり，そして名とは名づけられるものの似像であるのだから，有限な一つの言葉（una palabra limitada）が限界をもたないものの似像となるということを，どう理解したらいいのか。」

[168]

これは，神が自ら与えた名の啓示に拠るしかない。

「そうした名は，神が神自らに与えた名であって，神が自らについて理解しておられる一切を明かすものである。それはつまり，神が自らを理解しつつ自らの内に生んだ神の懐胎＝概念にして言（el concepto y verbo）である。そして，我々に言われ我々の耳に響くこの言葉は，神の懐に生まれ生きておられるあの永遠にして理解不能な御言葉（palabra）を，我々に説明してくれる（explica）徴（señal）なのである。ちょうど我々も，心の秘密（secreto de corazón）を口の言葉で説明するように。」[168-169]

こうしてレオン＝マルセロの論は，神の御言葉としてのキリストというキリスト教の中核に接合していくのだが，しかしそのキリスト—彼のキリスト理解は，いわゆる歴史のイエスに収斂するわけではない—もまた，具体的・実定的な言葉によって，つまり聖書中に与えられたキリストの名たちによって我々に与えられる他はないのである(17)。ここでは，そうした聖書の言葉への期待は，言葉を以てしては遂に届かない，神そのものである神の名への無窮の憧憬に，またその届かなさゆえの或る悲しみに浸されているようでもある。「長い人生の労苦の果て」にある「黒胆汁質の（メランコリックな）」マルセロという人の魂の情調が滲み出ているようである。（ただしここでは，レオンの造形であるマルセロの造形と，ルイス・デ・レオンその人とを単純に等置すべきではないだろう。）

「しかし［...］神は諸々の固有名をもつと，またこれが神の固有名であると我々が言ったとしても，それが神の正確な名（cabal nombre），つまり神における全てを包括しわれわれに解明してくれるような名だと言いたいのではない。固有のもの（el ser propio）と，等しいものないし正確なもの（el ser igual y cabal）とは別である。固有であるためには，言われている事物に固有な事柄の内の何かを言明していればよいが，その全てを十全にかつ正確に言明しているのでなければ，等しいものとはならない。だから，神に対して我々がこれを名づけるときにも，完全な名（un nombre entero）を，神に等しい名を，与えることはないし，神がいかなる方であるかを十全かつ完全に理解することもまたできない。というのも，口に上る言葉は，魂が知解することの徴（señal）でしかないのだから。かくて言葉が，知性が届かないところに届くことはありえない。」[168-169]

こうして，聖書神学者レオンは，聖書の全体に示されているキリストのさまざまな名を，「ほとんど無数の（casi innumerables）」名を，あたかも神自身の貴い足跡を拾い集めるようにして，精査していくのである。キリストに多くの名が与えられているのは，「それは，キリストのもつ諸々の善は，魂の一つの視野（una vista del alma）に収まることがなく，況や一つの言葉で名づけられることはできないからである。〔そうした〕人間の弱い知性のために，聖霊は少しずつ，部分的に，それぞれの名のもとに，キリストの善を現前化してくれている。」[169] そこに読み出されるのは，キリストの「大いなる偉大さ，何よりも豊饒な完全性の数々が込められた宝蔵であり，またこれとともに，そこから生まれ出て我々の上に注がれる数多の御業や善」[169] である。

そしてそれらを，「注ぎ口の小さい水瓶から水を少しずつ注ぎ出す」[169] ように，少しずつ，一歩一歩，知解していく他はないのである。これが，『キリストの御名』本編でなされることの神学的意味にほかならない。

3. ルイス・デ・レオンの言語神秘思想の位置

さして長くない「序論」の相当部分を引用しながら，レオンの「名」の理解を丁寧に辿ってきた。個々の「キリストの名」について語られる本篇に立ち入らずにレオンの『キリストの御名』についての論を閉じることはもとより不当であろうが，すでに紙数を大きく超えている。

以上のごとき，ルイス・デ・レオン独特の神名理解，聖書理解，聖書解釈思想の特徴をさいごにまとめておこう。

レオンによれば，言葉（名）は，たしかに，名づけられる当のものとある意味で等置されるほどの意義と力をもつ。レオンの言葉への信頼は厚い。そうした実相開示力とでも言うべき力をもった名，それが名づける実在を，その名を知る魂の内に何らか現前させる力をもった名が，神であるキリストについても，聖書には幾つも記されている，とレオンは見なす。そうした名ないし称号，つまりキリストを呼ぶための名は，それぞれの仕方でいわば神の「代理」を魂の内に与えてくれるのだから，それらの名が潜在的に持つ意味作用，意味連関を，伝統的釈義に加えて，新たにレオンが学び見出したヘブライ語言語学やカバラ的手法までを駆使してさまざまに解明していくことは，その名の意味を，いわば水平的に豊かにしていくことである。そして，それによって魂の内での神（の代理）が占める位置はますます大きくなり，その結果，当の魂は，垂直的にも神に近接することになるのである。したがってレオンにとって，神に近づく，という宗教的ないしは神秘主義的理想は，具体的，実定的な名を，つまり言葉を，それが神そのものに届くものではないという理由でいわゆる否定神学的に棄てて行き，言葉のレベルを超えた言わば沈黙の内に神に垂直的に帰入する，といったタイプの神秘思想とは根本的に異なる。それは，言葉を棄てていくいわば垂直志向の神秘主義ではなくして，あくまで聖書における神の名を水平的に収集し探索することで神のあり方に接近していく，という態度が彼の聖書神学が目指したことであった。彼はあくまで，言葉の知識を愛する文献学者 philologus であり，また言葉の美を愛する詩人 poeta だった(18)。その言葉を巡る彼の営みが，聖書に啓示された神の名を巡って為されるとき，そしてそれがつねに言葉の届かない「神自身」への憧憬によって貫かれているかぎりで，彼はそれによって神自身に接近する神秘家 mysticus ともなる，と言ってよいだろう。

註

(1) 以下，その活動の拡がりを示すために，レオンの主要著作を挙げておく。ラテン語神学書：*De Incarnatione. De Fide. De Creation. De Praedestinatione.* etc.；スペイン語神学書：*Un quodlibeto sobre el pan y el vino que Melchisedec ofreció a Abraham. De las diferencias entre la Ley Vieja y la del Evangelio.* etc.；ラテン語聖書注解：*In Ecclesiastem. In Epistulas Pauli ad Galatas*（1589）. *In Canticum Canticorum Explanatio triplex*（1580, 1582）. etc.：スペイン語聖書注解：*Exposicion de El Cantar de los Cantares. Exposición del Libro de Job. Comentario sobre Psalmo XXVI*（1581）；スペイン語論考：*La Perfecta Casada*（1583, 85,86,87）. *De los Nombres de Cristo*（1583, 1585, 86, 87）, *Vida de Santa Teresa. Apología de los Libros de Santa Teresa.* etc.

(2) １６３１年に，大劇作家フランシスコ・ケベードによって刊行された詩文集には，叙情詩２６篇，模作詩（Petrarca, Joan de la Cassa, Bembo, Horatius に倣う），ラテン語詩（*Ad Dei Genitricem Mariam*），古典詩翻訳（Vergilius, *Ecloga*; *Georgica*; Horatius, *Oda*; Pindaros, *Olympica*; Tibullus, *Elegia*; Euripides, *Andromaca*），聖書翻訳（詩篇約２０篇，箴言，雅歌，ヨブ記）が収められている。

(3) 代表作として，「フランシスコ・サリーナスへ *A Francisco Salinas*」「隠遁の生 *Vida Retirada*」，「静謐の夜 *Noche Serena*」，など。

(4) レオンのスコラ学については，まだ十分な研究が為されているとは言えないようである。大学での講義録も完全に刊行されてはいない。（cf. Salvador Muñoz Iglesias, *Fray Luis de León, Teólogo*, CSIS, Madrid, 1950; Colin P. Thompson, *The Strife of Tongue. Fray Luis de León and the Golden Age of Spain*, Cambridge U.P., 1988.）総じて，講義録に見られる彼のスコラ学は，トマス主義でもスコトゥス主義でもオッカム主義でもなく，また新興のイエズス会のそれとも異なる，独自の折衷的なものだったとされる。（cf.Angel Custodio Vega, O.S.A., *Cumbres místicas. Fray Luis de León y san Juan de la Cruz*, Aguilar, Madrid, 1963; Carnos G.Noreña, Studies in Spanish Renaissance Thought, chap.III. Fray Luis de León and the Concern with Language, Nijhoff, 1975.）

(5) 『キリストの御名』のテクストとしては，Fray Luis de León, *De los Nombres de Cristo*, Edición de Cristóbal Cuevas García, Cátedra, Madrid, 1980 を用い，引用に際しては同版の頁を［］内に示すが，原語の表記は現代スペイン語での正字法に改めた。他に，Fray Luis de León, *De los Nombres de Cristo*, ed. de Federico de Onís, 3 tomos, Espasa-Calpe, Madrid ; *Obras Compelas Castellanas de Fray Luis de León*, Prólogos y Notas del P. Felix García, O.S.A., 4a edición corrigida y aumentada, B.A.C., Madrid, 1962, tomo 1, pp.361-825.も参照する。翻訳としては，Robert Ricard による仏訳，Luis de León, *Les Nombres du Christ*, Études Augustiniennes, 1978, Manuel Durán と Eillliam Kluback による英訳，Luis de León, *The Names of Christ*, Paulist, Press, 1984 を参照する。

(6) 同書は，彼の生前に限っても，1583, 1585, 86, 87 の四次にわたって出版されており，最初の版では，名前の数は十だった。

(7) 聖書にある「キリストの名」について列挙し解説するという形式の著作は，アウグスティヌス会の先達であるアロンソ・デ・オロスコ（1500-1591）に帰せられる小著『キリストの九つの名 *Nueve Nombres de Cristo*』に先蹤があるが（上記，Espasa-Calpe 版，Apéndice；B.A.C.版，pp.831-864.），このテクストをレオン自身のものとする説も有力である。挙げられる九つの名は，『キリストの御名』第一版の十のうち，「牧者」を欠くがあとは同じであり，論ぜられる順序も一致する。なお，同書が，擬ディオニュシオスの『神名論』に代表される西洋宗教思想史における「神の名」を巡る思

索の伝統に連なるものであることは言うまでもない。レオンの場合は，この伝統はユダヤ教カバラや「神の９９の名（al-asma' al-husna)」を説くイスラム教にまで連なっているが（cf.Catheline Swietlicki, *Spanish Christian Cabala*, chap.4, Fray Luis de León: Chrsitian Cabala in *De los Nombres de Cristo*, Univ. of Missouri Pr., 1986, pp.82-154)，ただし後述するように，彼にとっては「神の名」ではなくあくまで「キリストの名」が問題であった。

(8) Víctor Garíca de la Concha, "Fray Luis de León: Exposición del *Cantar de los Cantares*", in: Víctor Garíca de la Concha （ed.）, *Academia Literaria Renacentista I. Fray Luis de León*, Ediciones Universitad de Salamanca, 1981, pp.171-192.

(9) フランスにおけるレオン研究の泰斗だったAlain Guyは，この一節に，レオンの言語理解と，それに根ざす一種の言語神学の核心がすべて語られている，としている。cf.Alain Guy, *Fray Luis de León 1528-1591*, José Corti, 1989, p.122. Guyによるレオンの「名」の理論についての詳細な検討は，id., *La Pensée de Fray Luis de León. Contribution á l'étude de la philosophie espagnole au XVIé sicle*, Vrin, 1943, pp.101-183.

(10) レオンの「名」の理解，またその説明に用いられる語彙は，当然，当時のスコラ学的言語論を受けているはずである。また，それらは一定の世界観ないし形而上学に結びつくはずであるが，それらについての探索は筆者の手に余る。なお，注（12）を参照。

(11) 序章におけるレオンの言語論の構造を図示すれば，おおよそ以下のようになろう。

「事物」としての名：物質として存在する個物からなる宇宙

|

（自然的（natural）産出：同形性（conformidad））

↓

「観念」としての名：知性の内なる言語

|

（人工的（de arte, por arte）作出：同形性の残存）

↓

「言語」としての名：音声と文字となる言語

・原初の言語（アダムの言語，ヘブライ語）：神的起源による同形性の賦与

↓

・一般諸言語

(12) とは言え，このように名を考えるとき，当然，普通名詞・一般名詞と固有名詞の違いが問題となって来よう。レオンにおいては，名とは，まずは知性の内にある「もの」の代理なのだから，これは，「もの」すなわち個物についての観念と，一般者についてのいわゆる普遍概念の性格にかかわる問題に直結する。いわゆる普遍論争に連なるこの問題系については，しかし，レオンは深入りしない。論の焦点ないし目標は，あくまで「神」という「個物」をどう名づけるか，に据えられているからである。少し後のところでレオンは，こう注意している。「我々が知性のなかに或る似像を形成するときには，ある時には，それは多くのものの似像（imagen de muchos）である。つまり，そこにおいて，多くの事物が，他の点では異なっていながら，そこでは相互に一致し（convienen entre sí)，同じに見えてくる（se parecen）ところのものの似像である。いま一つは，われわれが形成する似像がただ一つの事物の絵姿（retrato）である場合で，他の事物と関わらないそれ固有の（propio）絵姿である。これと同じ仕方で，言葉ないし名にも，多くのものに当てはまるものがあり，これは共通の名・普通名詞（nombres comunes）と呼ばれる。別の〔種類の〕名はただ一つのものに固有のもので，ここで語ろうとしているのはこちらについてである。」[158] 上述のように，レオンの世界観では，宇宙は個物としての「事物」から成るのであって，普通名詞の指示対象としての普遍者

はいわゆる離存的実在性をもたない。十六世紀の人であるレオンには未だ近代哲学の認識論的枠組があるわけではないが，その思考の基本的枠組は，少なくともオッカム的唯名論以降のものであると言ってよい。

(13) 華厳教学にいわゆる因陀羅網法界のイメージである。ルルスやクザーヌス，さらには現代の「ニューサイエンス」にも，類似のイメージは見出されるだろう。

(14) このようにも言われている。「この点からして，名には二つのあり方（maneras），あるいは二つの種類があることもまた知られる。一つは魂においてあるところのもの，いま一つは口において響くところのものである。第一のものは，事物を知解する知性のうちにその事物がもつ存在であり，第二は，事物を理解する者がそれを言葉によって言明し明らかにするときに，その者の口において〔事物が〕有する存在である。両者の間には以下のような同形性（conformidad）がある。つまり，前者も後者も似像であって，何度も述べたように，それの名であるところの当のものの代わり（substitutos）となる。しかしまた〔両者間には〕非同形性もあって，一方は自然による似像（imagenes por naturaleza）であり，他方は人工による（por arte）。私が言いたいのは，魂のなかにある似像や形姿（imagen y figura）は，それがその事物に対してもっている自然的類似（la semejanza natural）によって，それがそれの形姿であるところのかの事物の代わりをなすのだが，一方言葉（palabras）は，声（voces）を発する我々が，それぞれの事物に対してその声〔発音〕の徴を決めている（señalamos）のであり，こうしてその事物の代わりとなしているわけである。そして我々が名と言うときは，通常はこの後者の方を考える。前者の方がより本来的な意味で名（los nombres principalmente）なのではあるが。」[157-158]

(15) なお，知性の内で「精妙で霊的」となった「もの」たちを，「名」つまり言語的なものとして捉えることで，その同時共存というあり方がある種の現実性を帯びることにもなるだろう。というのも，先述来の一即一切の関係，一つの物が全ての内に，全ての物が一つの物の内にあるといってよい関係が，ある意味では言語としての名のレベルでたしかに成立していると見られるからである。現代の構造主義的言語理解が示したように，或る単語（「名」）の意味は，その語が属する言語体系――ソシュールの用語では「ラング」――の全体に依存している。つまり，一つの名の意味表示作用には，言語の共時的秩序においては，その言語を形成している他の一切の名が潜在的にではあれ構成的に参与している，つまりいわば内蔵されているわけである。

(16) 「第三のものは形態（figura）である。これは，それでもってその名を書き記す文字（letra）のもつ類似である。とともに，それらの文字の数（numero）や配置（disposición）における類似でもある。また，我々がそれを発音するとき我々のうちにしばしば生ずる類似でもある。この二つの仕方の〔形態の〕類似は，聖書のオリジナルな言語においては無数の実例が存する。」[161]

(17) 「キリストは神なのだから，その神性に関わる名ももっている。そのあるものは，第二位格に固有で，他のものは三位一体に共通である。しかし，後者については，私たちのノートは触れていないし，私たちもここでそれらについて論ずることはやめておこう。それらは，神の名であってキリストの名ではないのだから。ここでのキリストの名とは，その人性に関わるものだけである。」[170]

(18) 彼の詩作品は，とりわけその最上のものは，言葉を超えたものへのプラトン主義的憧憬を静謐に歌っている。がまた，それもやはり，詩なのであって，レオンはあくまで言葉によって，言葉の彼方を探り当てようとしているようである。

Draw Near to God through the Names of Christ: The Linguistic Mysticism in Luis de León *De Nombres de Cristo*

Yoshio TSURUOKA

Luis de León (1528-91), a famous theologian, Hebraist, and poet in Golden Age Spain, is also one of the representative figures of so-called Spanish mysticism. In the introductory chapter of his masterpiece, *De Nombres de Cristo*, he exposes in a succinct but very dense manner his original understanding of the nature of the "name" in general, as well as the divine names. In this article I carefully analyze his systematic arguments on Christ's names in that chapter of his work, and try to make clear the essentially "linguistic" nature of his mystical thought.

Compared with contemporary mystical trends - such as that of Teresa de Avila, which is characterized by ecstatic mystical experiences; or that of Ignatian mysticism, which can be called the mysticism of insatiable action; or the neo-platonistic negative theology that negates all linguistic expression of the divine - Luis de León's mystical thought is distinguished by his deep confidence and love of language, especially Biblical language. This is because reality itself is linguistic for him. The names of things are in a sense identical with the things themselves, and so are the names of God. Thus the way that leads the human soul to her perfection, that is, to resemble or draw near to God as far as possible, is to study the whole Bible and discover the infinitely abundant significations each "name of Christ" implicitly contains.

His theological thought moves within the element of language from the beginning to the end: it begins from *philological* research of the Biblical language and reaches its completion as a kind of *poetic* exegesis that *mystically* aspires the God who is conceived of as the "name" in the deepest sense.